

ベトナムからの労働力輸出に関する研究

— 韓国への出稼ぎを事例に —

平成 19 年入学

参加したフィールドスクール：ベトナムフィールドスクール

調査地 (調査国)：ハノイ (ベトナム社会主義共和国)

財津 信

キーワード：労働力輸出，実務家，援助，農村地帯，信頼関係

自分の研究テーマについて (600 字以内)

現在、グローバル化の進展とともに、モノやカネのみならず、国境を越えたヒトの移動も増加している。ベトナムとてその例外ではなく、1986年に対外開放(ドイモイ)政策を採用して以後、外貨獲得と貧困削減の重要な手段のひとつとなる労働力輸出は、国策として強く推し進められてきた。しかしながら、労働力輸出に関する法整備は遅れ、ようやく2007年に、「契約によって海外に働きに行くベトナム人労働者法」が施行されたばかりであり、その現実の姿はまだ明らかになっていない。

一方、1980年代までの高度経済成長により産業構造が変化した韓国は、深刻な単純労働力不足に陥り、外国人労働者の受け入れを始めた。当初は、日本の外国人研修・技能実習制度に類似した産業技術研修制によって外国人労働者を受け入れていた韓国であるが、度重なる外国人労働者に対する人権問題と彼ら・彼女らの失踪、また、市民団体の抗議などによって、雇用許可制という、外国人労働者を研修生としてではなく労働者として受け入れるシステムを導入した。

しかしながら、このような状況下において、ベトナムから韓国への労働力輸出に関する研究は、韓国側の視点によるものが主であり、ベトナム側の視点によるものは、ほとんどないといえる状況である。

そこで、本研究では、ベトナムから韓国への労働力輸出の実態を、ベトナム側の視点から明らかにすることを目的としている。

フィールドスクールから得られた知見について (600 字以内)

将来の職業選択として実務家を志すうえで、フィールドスクールが有意義な点は、やはり、実務家として第一線で活躍している方々の生の声を聞いた後、実際に援助が行われている場所に出かけて行って、それらを自らの目で確かめられるということであろう。

このたびのベトナムフィールドスクールにおいては、最初にハノイ市内で、国際協力機構のベトナム事務所の方や日本国際ボランティアセンター(JVC)のベトナム事務所の代表の方などから話を聞いた後、実際に、JVCが援助を行っている村を訪ねた。ハノイ市内で聞いた話でJVCの援助が村人らとともにあることは分かったが、訪問先の村における、村人らとJVCのベトナム事務所の代表の方との交わりの姿を通して、両者の間には大きな信頼関係が生まれ、JVCの援助が、本当にその村に受け入れられ、根付いているということを感じることができた。また、村人らの話からは、JVCの援助によって、彼ら・彼女らが大きな自信を得ていることも知ることもでき、よい援助の姿を学ぶことができた。

しかしながら、このたびのベトナムフィールドスクールにおいては、残念なことに村人らから話を聞

く機会しかなく、JVC が彼ら・彼女らとともに働いている姿を見ることはできなかった。あくまでもお客さんとしてではなく、よりスタッフに近い形で現地を見ることができたのであれば、実務家として働くということの現実の姿を、一層リアルに学ぶことができたのではないかと思う。



写真 1：ハノイ市内での国際協力機構ベトナム事務所の方の話の様子

写真 2：ナムソン村村長（左端）と JVC ベトナム事務所代表（右から 2 人目）

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？（400 字以内）

このたびのベトナムフィールドスクールにおいては、大きく次の二つのことを学んだ。一つ目は、二泊三日の滞在を通して知った貧しい農村地帯の現実の姿で、二つ目は、JVC のベトナム事務所の方と村人らとの交流の姿を通して知った、異国の地で活動を行うときに現地の人々と信頼関係を築くことが、いかに大切かということである。

まず、一つ目のことについては、現在貧しい農村地帯の住人にとって、海外への労働力輸出は富を手にするための重要な手段となっている。そのため、今回送られる労働者の背景を知ることができたのは、とても有意義であった。

次に、二つ目のことについては、本研究を進めるうえで欠かせないフィールドワークは、現地の人々との関わり合いが避けられないものであり、その点において、今回大きな示唆を与えられた。

以上、今回学んだことは、本研究テーマにより一層の深みを与えてくれるものだと考えられる。



写真 3：ナムソン村の様子